

今

回のテーマは「日本が世界に誇れるものは何か」である。ともすれば、

日本の経済成長が足踏みしはじめてから日本人は自信を喪失しているように見える。

私が初めて中国に行ったのは1979年、日中平和友好条約が締結された直後のことである。経済的な後進性が目立っていたが、担当のエリートたちはプライドが高く面子を重んじたから必死で先進国に追い付きたいと思っていたに違いない。その時、彼らのプライドを支えたものは「中華思想」であった。

中国側に都合の良い経済交渉が終わった後には、中国流の宴会が待っていた。教養の高い彼らは好んで「漢詩を吟じたり」「七言絶句の書をしたためたり」してもてなしてくれた。そんな発展途上国の中国は驚異的な経済発展を実現し、GDP世界第2位の経済大国になったのである。

なぜ京都人の価値観は少し違うのか？

ある学者がこんなことを言っていた。日本には、大和やアイヌなどの民族のほかに、「京都人」という民族がいる。そういわれてみると確かに「京都人」というのは、発想や行動様式が日本人離れしているといえなくもない。私も、京都生まれ京都育ちの京都人であるが、京都の人間はそのことを当たり前にやっているだけなのであまり

意識したこともない。外からの目で「京都人はこう違う」と言われて、初めて「なるほど」と気付くのである。一体、どこが京都人は日本人離れているのか。

中国人が中国という大国観を「中華思想」を中心に据えようとしているように、京都人も京都が日本の真の中心であると真剣に考えている人が多い。文化という日本のソフトパワーが1200年の歴史を辿ってきた京都に集まったということだ。

また、京都人は狭い盆地の中で応仁の乱に代表されるように度々、諸国の外敵から荒らされてきた歴史がある。それゆえ、限られた土地で自分たちの生活とテリトリー、そして「京都中華思想」を守るために、独自の文化を形成することで対抗してきたと言えなくもない。

独自文化のなかで生まれたものの一つに、商人気質がある。商人と言っても大阪商人ともまた違う。大阪商人は安く買って高く売るのが基本だが、京都の商人は元々の値段は普通でも、そこに付加価値を付けて高く買ってもらおうとするのである。極端な言い方をすれば、「これは京都でしか手に入らへんのだ



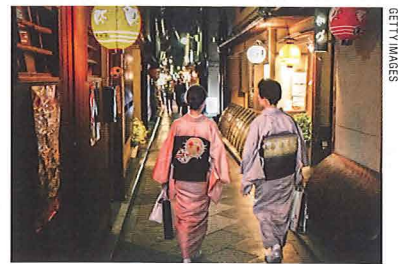
AROUND THE WORLD

山師の手帳

中村繁夫 Shigeo Nakamura

最終回 京都中華思想と日本のソフトパワー

写真・生津勝隆 Masataka Namazu



京都・先斗町

す」といえば、それだけで付加価値になるようなものだ。

世界に誇れる「ソフトパワー」先進国・日本

2020年には東京オリンピックがある。安倍晋三首相はじめチームワークで勝ち得たオリンピック招致のプレゼンテーションでIOC委員の心を動かしたものは何だったのか？ 日本チームはIOC委員への感情に訴えながら論理的な流れで発表し、各プレゼンターの役割は完全と言えるほどの説得力があった。

しかし、最大の決め手は日本（東京）の持つ「安全性」「日本の文化とソフトパワー」「情熱と誇り」だったのではないだろうか。最終選考に残ったイスタンブールもマドリッドも「情熱と誇り」では勝っていても「安全性とソフトパワー」では東京には敵わなかったといっても過言ではない。

私自身が世界を渡り歩いて日本ほど「安全で面白い国家」はない。日本の「文化や伝統」の価値を日本人自身が十分に理解していないからアピールが出来ないのが残念だが、ソフトパワー先進国として世界に貢献してゆく立場ではないかと考える次第である。

なかむら・しげお レアメタル専門商社、アドバンスドマテリアルジャパン（AMJ）社長。日本におけるレアメタルの第一人者。世界100カ国を訪問し、世界制覇を目指す。